

コロナ禍の全国高校軟式野球 安全な舞台、提供に腐心

日本高野連副会長 井上 康雄氏

新型コロナウイルスの感染拡大の影響で去年はほとんど中止となった高校スポーツは今年、感染対策をとりながら開催されています。第66回全国高校軟式野球選手権大会も先日、兵庫県明石市の明石トーカロ球場などで全国から16校が参加して開かれました。大会を主催する公益財団法人日本高校野球連盟副会長、井上康雄さんに開催にあたって特に留意した点などについて聞きました。

——大会を開くために、どのようなコロナ感染対策をとられたのでしょうか。

◆出場校、大会関係者には事前にPCR検査を受けてもらいました。例年、最初の3日間は勝ち上がるチームが明石、姫路両市で球場を入れ替わる形で試合をしていました。しかし、今年は移動距離を短くするため、開会式を2カ所で開催し、2回戦も同じ球場としました。また、いつもは無料開放している球場の入場者は、校長が連絡先などを把握できる出場校の選手らの保護者と控え部員のみとしました。

——大会を開催する意義、今後に向けた取り組みは。

◆すべての大会はプレーする球児たち、スタンドで応援する吹奏楽、チアリーダーら高校生が培ってきた練習の成果を発揮する場であり、我々は出来る限りそうした機会を安全に提供していきたいと考えています。専門家のご意見も聴きながら甲子園球場で開く選抜、選手権両大会で採用してきた感染症マニュアルは、大会を開くごとに少しずつ更新され、地方大会にも生かされていきます。

——軟式高校野球ならではの魅力は何でしょう。

◆硬式に比べて長打が出にくく、二塁からの生還は難しいこともあり、点が入りにくいと言われています。決着がつくまで1日15イニングずつ続けるサスペンデッドゲーム制だった7年前の準決勝は、4日間にわたってゼロ行進が続き、延長五十回でようやく決着しました。これは国内の野球の最長記録で連日、取材陣がつめかけました。現在は硬式同様、延長十三回からタイブレークを採用しています。

井上康雄 1958年、愛知県生まれ。毎日新聞社で運動部の記者、デスクを務め、松山支局長を経て総合事業局へ。選抜高校野球、全国高校駅伝、高校ラグビーなど高校スポーツやびわ湖毎日マラソン、毎日甲子園ボウルなどに携わる。特別囑託として日本高校野球連盟へ出向して17年から現職。